

校長研修だより190

「ゴールデンサークル理論」

2025・3・12 重枝 一郎

【新学習指導要領・解説総則編より・学習評価】

「各教科等の目標の実現に向けた学習状況を把握するために、指導内容や生徒の特性に応じて、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、評価の場面や方法を工夫し、学習の過程の適切な場面で評価を行う必要がある」

「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動を評価の対象とし、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」

私たちは、この「新学習指導要領」と、本校の最上位の目標である「自律的学習者（自ら学ぼう、自分で決める、“成長はたし算”というマインド）」、さらには、「大切なひとり（序列化ではない、自己の存在意義を深く認識する）」を育成するという“筋”をもって、未来を選ばなくてはならない。

今号は、このことに照らして、「定期考査」について考えてみる。

まずは、「定期考査」は、学校の慣例として行ってきたものであって、法や規則で定められるものではない。これまで私たちは、時期を区切り「定期考査」として、学んだ内容についてペーパーテストを行っていた。この評価は、資質・能力の一部しか評価していないことの意識は、「観点別評価」によって、最近は定着してきている。ただ未だに、「定期考査」に、評価全体が大きく縛られている人もいる。正直、私自身そのシャワーのみを浴びて育ってきたので、「定期考査」の背景にある、競争や序列化の意識を切り替えることが難しかったりする。

ところが、そもそも「評価」とは本来「観点別」である。

例えば、プロ野球開幕前の順位をテレビで解説者が予想する場面があるが、解説者は予想の根拠として、投手力、守備力、打撃力など複数の観点をレーダーチャートにして戦力を評価し、それらの観点を総合して順位予想を説明する。私たちの日常でも、車を購入する時は、複数のメーカーの車種、用途、外観、室内、安全性、燃費、価格といったいくつかの観点を総合して購入を決断している。

つまり何かを評価するとは、本来「観点別」に行うものである。

この「観点別評価」の導入から、「定期考査」の慣例について話し合う学校もでてきた。理由ははっきりしていて、「定期考査」に評価が縛られすぎていたからである。つまり、「定期考査」を主とした学習評価の在り方を見直す必要があるということである。そこで「単元テスト」の合理性が言われるようになる。各教科、単元によって生徒の学習状況を観る方法やタイミングは多様なので、単元や題材のまとまりの中で、3つの観点（「知識・理解」「思考・判断・表現」「主体的に取り組む態度」）に即してバランスよく評価を行うことがいいのではないかと。

ここで「単元テスト」のメリットについて述べてみる。

まずは生徒にとっては「勉強に取り組みやすい」「評価を学習改善につなげやすい」

「日常的に学習する習慣ができる」「単元シラバスをもらって見通しが持てた」。

次に、教師にとっては「評価規準を丁寧に評価できる（単元シラバスの活用）」「目標に達しなかった生徒の補充指導がすぐできる」という声がある。またこんな声もある。例えば、定期考査同日に数学、地歴、保健の3教科があったとする。テスト前1週間は、生徒の大半は試験範囲の広い数学と地歴に学習時間のほとんどを費やす。単位数の少ない保健にとっては時間を奪われる形になる。これが「単元テスト」なら、それぞれのタイミングで評価を行うのでテストが重なることも少なく、時間を奪われることはない。

逆にデメリットは何だろう。よく言われるのが、①「単元テストを行う教科が同じ日に複数重なると生徒の負担になる」、②「時間割通りに同じテストを行うと、後から受けるクラスの生徒に問題の内容が伝わる」、③「テストを受けられなかった生徒の評価どうするか」。この3つはよく聞く。

①については、例えば1日最大3教科までとしてルールを決め、調整するしかない。校内のネットワーク上で調整していく。

②については、後から受けたクラスが有利となる考えからのものである。この考えの本質は、競争意識を動機とした勉強をさせていることになる。これは、最初に書いた“筋”に反する。今ある評価の在り方に反するということである。教師が生徒に、自分が学習した過程の中でどう向上したのかを見取るものが評価という意識をつけていくしかないのである。それには、学習評価を「序列付け」としてきた教師や親の意識が変わらなないと生徒には伝わらない。この意識改革が肝になる。そうでないとこのデメリットの論議は続く。ただ、この考えが共有できると、各教科・科目が適切なタイミングで行う「単元テスト」でよくて、一律に時期をそろえて行う「定期テスト」にする必然性はない。

③については、②を踏まえて各教科担当が考えることになる。

このような意識改革の話でよく言われるのが「朝課外」の話である。正規の授業以外に行う「朝課外」は、最初に書いた“筋”に反すると言われる。「朝課外」は保護者の期待、生徒のためという考えがあった。しかし、限られた時間の中で学んだことをもとに、家庭で過ごす時間を含め、生徒が主体的に取り組んでいくような学習の在り方を目指すことが、生徒の未来につながるという意識に変えていくことが“筋”になる。

私が今回のようなことを書かなくても、先生方はわかっている、ジレンマを抱えていると思う。私も同じである。知りながら脱却できない。ただ、いつも思うのは、過去ではなく、未来を選ばなくてはならないということである。

“筋”をもって進めるということは、「ゴールデンサークル理論」のことになる。

サイモン・シネック
【ゴールデンサークル理論】
内側から外側に物事を進める

全教育活動で“筋”を通していく

